

札幌会場

アイヌとして生きるまで

8月20日(火) 19:00~20:30

講師

北海道ウタリ協会苫小牧支部副支部長
砂沢代恵子

私は、2年程前までは、北海道ウタリ協会苫小牧支部の婦人部長を10年ほどしていきまして、今は副支部長をさせていただいております。

最初にお話したいことは、今年の1月23日から2月3日までイギリスのスコットランドへ行ってきたことです。それはこちらのアイヌ文化振興・研究推進機構の事業で、二風谷に住んでおられましたニール・ゴードン・マンローコレクションの複製事業のためだったんです。私はマンロー先生のことは、ずいぶん前にテレビ番組で見て覚えていました。イギリス人のお医者さんで、アイヌの研究をしている人です。

複製事業へは周りの人の勧めで、本当に軽い気持ちで応募しましたら、何ヶ月も過ぎてすっかり忘れていた頃に、イギリス行きが決まったよという電話がありました。何日かしてから機構の方から正式な通知がありまして、まず何をしたらいいかを考えました。きっと向こうに行ったらお世話になる人が何人かいらっしゃると思い、お世話になった方のためのプレゼントとして、マタンブシ(鉢巻)とか脚半などの小物を何点か作りました。

12月には打ち合わせがありまして、北海道開拓記念館へ出掛けていきました。一緒に行く7人が集まりました。その方達は、以前から名前は聞いていましたが、会ってお話ししたことのない方達がほとんどだったんですね。皆さんそれぞれ名の通った方ばかりですから、こういう立派な人達の中に入って大丈夫かなとすごく心配だったんです。聞くとところによると、応募者が大勢の中から選ばれたということで、どうして私なのかなと疑問でした。私を除いた6人の方達は、彫刻とか刺繍とかで生計を立てている方達がほとんどです。私はパートをしながら刺繍を教えたりもしているんですが、刺繍だけでは生活できるような状態ではないんですよね。

打ち合わせでは、マンローコレクションの中からルウンベという種類の着物を2枚複製することに決まりました。

百年以上も昔の着物を複製するので、まずは材料が心配でしたね。他の3人の方達もやはり私と同じ心配をしていました。いろんな話をしているうちに、小さな写真だけではわからないので、現物を見てから材料とか布は考えようね、持っている物はお互いに協力し合って、助け合ってやっていこうねとお互いに励まし合いました。不安もそれで少しはおさまって別れたのです。

出発の日が来ました。千歳空港に集合した頃は、うきうきして、とても嬉しかったですね。エジンバラ空港まで13時間も飛行機にりましたが、その割にはそれほど疲れも感じず、次の日、いよいよ国立スコットランド博物館に向かいました。スコットランドは、日本とはほぼ同じような気候で冬でした。緯度が高いので、朝でも10時近くまで、空が暗いのです。それで夜は早く来ます。夕方でも4時、5時になるともう薄暗い。雨も多くて、一週間ほどいたのですが、ほとんど雨ばかりだったんです。周りは石造りの立派な家が立ち並んで、映画にでも出てくるような素晴らしい建物が並んでいるんです。すごいね、すごいねといいながら博物館に着きました。博物館に入るのも毎日大変なんです。毎朝サインして、出てくる時はチェックされました。

それで、マンローコレクションは、一つずつ出てきたのですが、なんともいえない感動を覚えました。ほとんどが百十何年前の物だったんです。最初に出された時、私が複製するのだと思って、はっと見た瞬間、どーっと涙が出たんですね。今まで博物館などへ行ってそういう古い物を見た時に鳥肌が立つということはあったんですが、涙が出るのは初めてでした。博物館などで見る時はガラスケースの外からしか見られないのですが、その時は現物を手で触れられるぐらい近くまで寄って見られましたから、大げさにいえば、気持ちが伝わったのかなという感じがありましたね。本当にこれは不思議なことだなと思います。どんな人が誰のために一生懸命作ったのか。きっと本当に愛する人のために布のない時代に布を集めて、一針一針心を込めて作ったんだろうなと想像できるような、作品一つ一つの

製作者の気持ちが伝わってきたから、そういう感動があったのではないかなと思います。まさか、百何十年以上も後に自分の作ったものを複製されるなんて思ってもいなかったでしょう。

1日目は朝10時から5時まで博物館で調査をしました。だいたい1週間行ったのですが、これは本当に大変なことになったな思いました。どうして私は今ここにいるんだろうと、責任の重さがどーんときたんですね。私が複製することになりました1枚目の着物は、マンロー先生が1番気に入っていたものだったという説明がありました。それを聞いた時に、その責任の重さにさらに拍車がかかりまして、1週間、観光はなしで、毎日博物館通いをしました。寸法を測ったり、着物の裏面の処理の仕方とか、布の色や糸の色などの素材の写真もたくさん写しました。

まずは材料の心配がありましたね。女性は4人行っていたのですが、一緒に行った3人の方々には、ずいぶんお世話になりました。そんなに悩んでばかりいてもしょうがない。もしかしたら、あの衣装を作った人がどこかで私を見ているかもしれないと思ひまして、私は私なりに頑張ればいいんだと思うようにしたんですね。

実をいうと、私は本格的な複製というのは初めてなんです。私は旭川出身ですので、今まではチザリとかチカラカラベとかルウンペという種類の着物が得意というか好きだったので、だいたいそういうものばかり作っていたんです。マンローコレクションの中の8枚の着物の中からルウンペ2枚を私がさせてもらうことになったので、本当にラッキーだったんですね。そうはいいいましても、本当の苦しみは、それからだったんです。大げさだと思うかもしれませんが、できるだけ本物に近い物に作らなければならないのが本当の複製です。写真1枚だけ見て同じような物を作ればいいというのは全く違います。着物の寸法ももちろんなんです、白い布を貼るにも寸法は違っちゃいけないと私は思うんですね。同じ物ができるはずはないんですが、少しでも近い物にしなければならぬと思ひまして、まずは少しでも本物に近い布を探さなければなりませんでした。

スコットランドから帰ってきて時差ぼけもあるはずなんです、帰ってきた次の日から布地探しを始めました。横山さんと河岸さんと3人で苦小牧市内の布を売っている店を回りました。それでもないので、古着屋とか布団屋まで探したんですね。他の2人はそれなりに見つかったようなんですが、私が作る2枚目の袖と身頃の間に3色の接ぎが入っていて、そこに使う木綿とシルクの布だけは苦小牧の古着屋で見つけて買えたんです。すぐにでも始めて、約1月後には納めなければならないんですよ。けれども、土台になるチェックの布が見つからないのです。千歳や恵庭、札幌の布屋もずっと回ったり、ぎりぎりまで、もっと合うのがないかと一生懸命探しました。

私はそれまで衣装を1枚作るとしたら1年とか半年がかりで作っていたので、1ヶ月くらいで作らなきゃならないというのは、ものすごく大変でした。知的障害児の施設でパート勤めをしていますので、本当に大変でした。似たような布で妥協せざるを得なかったですね。

複製する場合は、見た目も大切だと思いますが、わざわざスコットランドまで行って、百何十年以上も前の大切なものに触れさせていただいたんですから、手触りとか風合いも似た物にするのも大切なことじゃないかなと思ったんです。最初は古い布を使って複製しなければならぬかなと思ったんですが、古着屋で必死になって布を探している時に、今複製するんだから別に古い布じゃなくてもいいんじゃないかなと思ったんです。百年以上も前のその衣装を作った人も、その時はきっと古い物ではなくて新しい布を使ったかもしれないと思ったんですね。だから、現在、複製するんだから古くなくてもいいのじゃないかなと思って、私は全部新しい布で作ったんです。見た目や色合いが似ていたり、手触りや風合いが似ていたというだけで、それに決めました。

1枚目に作らなければならないのは、マンロー先生が1番気に入っていた着物で、チェック柄のものです。スコットランドではチェックとはいわないで、タータンというんです。スコットランドではタータンは家紋のようなもので、その家その家のタータン柄が代々伝わってきているそうなんです。だからこそマンロー先生はその衣装が一番のお気に入りだったと思います。この衣装をチェック柄で作った人は、お洒落で素敵な女性だったんだろうなと思います。現在私達が民族衣装を作るとしたら、チェック柄で作ることはちょっと考えつかないと思うんですね。

2枚目は3ヶ月の期間がありましたが、1枚目にエネルギーを使い過ぎましたね。2枚目の布は苦小牧で手に入れてあったものですから、材料に対してはあまり困らなかったんですよ。また同じルウンペですが、上に貼る白い布は接ぎがいっぱいで、3種類の布を使っています。目の粗いのと細かいのとその中間ぐらいのと3種類使っているの、作る人は本当に大変だっただろうなということがよくわかる着物でした。2枚目の着物は、一見して簡単そうに見えましたから、これをしたいと希望を出して決まったんですが、これはとっても難しかったです。1枚目は、布探しに苦労しましたが、刺繍はそれほど苦になりませんでした。2枚目の時は時間にちょっとゆとりがあったので、思うようにならなかったところは解いて何回もやり直しました。

こうして悩んで苦しんでやっとの思いで素晴らしい仕事をさせていただきました。私なりに今までになく一生懸命に頑張りましたね。こういうことは二度もあるとは思いません。たくさんの応募者の中からどうして私が選ばれたのかはわかりませんが、本当に有り難く感謝しております。今振り返ってみて苦しかったこともずいぶんありましたが、少しずつ出来上がった時の嬉しさとか完成した時の喜びはすごく大きかったですね。

8月から横浜にあります神奈川県立歴史博物館でもマンロー展をやっているんですよ。それで、私も行って見えました。とても広いスペースに私達イギリスに行ったメンバーの作品も展示されていました。北海道開拓記念館では15点だったのですが、さらに24点増えまして、7人が製作した作品全部が展示されました。素晴らしかったです。

マンローコレクションの話はこのぐらいにしまして、次の話をしたいと思います。

私が講師としてアイヌ刺繍を教えることになったのが、平成4年の夏だったと思います。アイヌのことで私ができることは刺繍ぐらいで、伝えていけるものなら私のできる範囲で頑張らなければならぬかなと思うようになったんです。平成元年ごろに、職業訓練指導員の免許も取りました。苫小牧には5年前に駒沢大学ができ、それと同時に、苫小牧駒沢大学アイヌ文化及び環太平洋先住民族文化研究所ができました。その研究所で、学生と一般市民を対象とした「アイヌ刺繍講座」ができたんです。その講師をさせていただいてから今年で5年目になりますが、今は夏休みでまた来月から後半の部分が始まります。

これが好評で、1年目は15名の募集に、応募者が45名ぐらいになったんです。15名の予定が45名だと、ちょっと多いなと大学側も私とまどっていたんですが、アイヌ刺繍に少しでも興味を持ってくれる人がこんなにいるのだったら、30名ぐらいまで増やそうということになりました。応募者が多いということで次の年から年間20回にし、春から10回、夏休みが終わって秋から10回の開催で、春と秋に30名ずつ募集し、年間60名も集まったんです。教材を作るのは大変なんです、嬉しいものです。

1回受講した人は次回からは応募できないということになりました。まずは初級から始めますから、毎回初級ばかりやっていますと人が少なくなってきました、去年ぐらいから中級クラスを作ったんです。そうしたら前回受講した人も来るようになりまして、また人がちょっと増えてきて、今年からは上級クラスも作りました。そこで作った作品は、毎年大学祭の時に展示します。みんなに見てもらうような作品を作るということで、それを楽しみにしながら頑張っています。作る物は、初級の人達はコースターや巾着袋、テーブルセンターぐらいから始めて、アイヌ刺繍の基本的な模様を小さい物からやっています。そして、中級、上級になりますと、少しずつ大きな物とか複雑なものに進んでいくようにしています。そうやって毎年、大学祭などで発表の場があるので、今年は何点出せるか、頑張れば2点出せるよ、3点出せるよといって出してもらっています。

苫小牧駒沢大学の講座には、1回目から男性が一人いたんですね。55歳くらいの人だったと思うのですが、手は遅いし、目は粗いし、近くで見たらひどいのですが、遠くで見ると何ともいえない味があっているんですよ。講座にはいつも休まずに来て皆勤賞なんです。大学の講座には苫小牧の市民だけでなく、白老、千歳、平取からも来てくれました。

この講座とは別に、1回目の講座の修了生だけで作った教室があります。まだ刺繍を続けたいという人達だけの集まりで、それじゃ自分達でやろうということで、場所は苫小牧の生活館で始めました。大学とはまた違った雰囲気でもとても楽しく、またみんな一生懸命ですから進むのも速いのです。その教室も毎年秋には作品の展示会をします。その展示会には、私は口出ししないんですよ。自分達で一生懸命展示したり、看板を書いたりして、それなりに結構楽

しくやっています。また、教室の生徒の作品も大学祭の時に展示されるものですから、大学で講座を受けている初級生は先輩の作った物を見て、早く上手になって早くこういう上級の大きな物を作りたいという気持ちになりまして、大学だけでなく教室の人達も来てくれますし、大学にも毎年足を運ぶようになるんですね。そういうことで、アイヌ刺繍を通してアイヌ文化に少しでも興味を持ってくれる人が多くなってくれたらいいことだなと思っています。

教室の生徒達は本当に一生懸命で、5年もしていますと、腕も上がります。私も負けそうなんです。その中の1人は去年の機構のアイヌ工芸作品コンテストで奨励賞をいただきました。私もとても嬉しかったです。本人も喜んでいましたね。私の生徒の中からも認められるような作品を作れる人が出たんだということで、また感激しました。自分がアイヌ刺繍を教えてきて、今年でちょうど10年になるのですが、やっと人から人へと伝えられて、このような作品が出来たんだと、すごく嬉しかったのです。

その生徒さんは既婚者で、アイヌ刺繍をする前は、縫い物をしたことがない人なんです。旦那さんのズボンの裾上げもしたことがなく、旦那さんの作業ズボンの裾は、ホチキスで留めていたと聞いたものですから、最初、私のところに来た時は、もういったいどうなることかと思いました。ですが、今では本当にすごいんですよ。民族衣装も5枚目ぐらいに挑戦しています。やれば本当に出来るんだと思います。

つい最近では、着物を作るから図案を考えてほしいと、それも簡単にいってくるんですよ。ちょうど私も忙しかったものですからなかなか出来なかった時に、思うところがありました。もう5年はやっているんだから、そろそろ図案も自分で考えるようにしたらと言ったら、作ってきたんです。同じ生徒でも、何にも考えないで与えられたものをただ刺している人とそうじゃない人がいるんですよ。その生徒さんは少しでも自分で独立して、教える者から離れてやって行きたいという気があったと思うんです。

自分でまず袖の図案を考えてごらん、おかしかったら直してあげるからねといったら、袖の図案を作って持って来た。まっまっ、そんな悪くないんですよ。だから、今度は背中図案をと先に進めていきました。自分で作った図案で作品を作ったら、売ったとしても、コンテストに出して賞を取っても、誰も文句をいう人がいないんだよという話をしました。頑張んなさいよと励ました。先行きはやっぱり人に教えられるようにもなって欲しいですね。だからそういう人が出てきたということが、何せ嬉しかったですね。

苫小牧駒沢大学のアイヌ刺繍講座は毎週木曜日の2講時目なのですが、生活館での教室の他に苫小牧道新文化センター、それから千歳の道新文化センターでもやっています。ということで、アイヌ刺繍を通して、アイヌ文化、アイヌ民族について少しでも理解してもらいたい、また、日常生活の中にアイヌ模様を取り入れていただけたならというのが私の思いですので、大学や道新文化センターなどでアイヌ刺繍講座を実現できましたことを本当に嬉しく思います

し、感謝しております。

これまでの私の生徒さんの中には、針を持ったことのない方もいました。講師を始めた頃に一人大学生の男の子がいて、その子もさっきいました男の人と一緒にしたね。目は粗くて手は遅いんですが、遠目で見たら味のあるものが出来ているのは、本当に不思議なんですよ。針も持ったことのないそういう男の子までがアイヌ刺繍に興味を持って始める方が何人かいます。このアイヌ刺繍はそういう人でもそれなりに味のある良いものが出来るんですね。

刺繍にもいろいろあり、日本刺繍とかフランス刺繍とか、今だったら戸塚刺繍などいろいろありますが、そういう刺繍の経験のある人がアイヌ刺繍をしたからといって、必ずしも良いものができるとは限らないんです。上手とか下手ということではなくて、このアイヌ刺繍に限っては、それはどういうわけか私もわからないところもあるのですが、アイヌ刺繍を大切に作る気持ちが伝わるのではないかなと思うんです。そういう心が表れているのがよい刺繍だと私は思っています。私が、いつもみんなにいうのは、「優しい気持ちになって、優しい心で刺してみてください。そうしたら、きっと良いものができると思いますよ」ということです。不思議と、その時の精神状態がわかるもので、もうちょっと落ち着いてしてみたらということがよくあります。先を急いでやったり、心が乱れてやっていると、針の目にもそれが表れるんですね。だからもっと落ち着いてゆったりした気持ちでやってごらんとうよくいいます。

夫や子供、お友達とか自分の本当に大切な大好きな人のために、一針一針に心を込めて作るものがアイヌ刺繍だと思うんですね。アイヌの女性が親から子へ、子から孫へと受け継がれるもので、模様の一つ一つに作り手の祈りとか、また願いが込められています。特色のあるアイヌ模様は、着物とか刺繍ばかりじゃなく、他にもいろんなアイヌの物に見られ、昔使っていた物は本当に素晴らしいと心からいつも思っています。私にも砂沢家と川村家の先祖の着物の模様、自分が継承すべき模様があります。実際にそういう物が残っているということは、本当に幸せなことだと思います。有り難いことに、私には2人の娘がいます。2人とも刺繍が大好きなんです。今はまだ趣味でしかしていませんが、長女が機構のコンテストで優秀賞をいただいたんです。その時は本当に嬉しかったですね。本人も嬉しかったと思います。私も驚きましたが、本人も本当に驚いていて、これからもずっと刺繍は続けていきたいといっています。何かのきっかけでアイヌの子供達がまたアイヌとして生きていけたなら、アイヌ刺繍が導くアイヌの精神が宿って生きていけたなら良いなと思います。

アイヌの人達はみんな先祖には必ず持っていたと思われる模様があります。ただ、あるとしてもどこにあるのか、自分の先祖が作ったのがどれなのか、全くと言っていいほどわからないと思うんです。着物ばかりじゃなくて、いろいろな物があると思います。今回、私が複製させていただきましたマンローコレクションにしても、どこかの博物館にもたくさん古い物が残っているのに、残念なことに製作者が誰かわからないんですね。わかるものもあるのかもしれない

いのですが、ほとんどがわからないように思います。それは古い物を見るといつも思うことなんです。製作者がはっきりすれば、その人の遺族が伝えていくことができると思うんです。昔のアイヌの人が大切に守ってきたものを崩さないようにし、その中で自分の物を生み出して、伝統文化を守っていかなければならない。本当にそれが大切なことだと思います。

自分がしてきたことを子供に受け継いでもらえたら、それは本当に幸せなことだと思います。私もアイヌ刺繍をしたり、また人に教えるようになったり、この度のマンローコレクションの複製にしても、私にしては思いもよらないことなんです。これは、みんな私の先祖が導いてくれていると思うことが度々あります。本当はウタリ（アイヌ民族の仲間）の人達にアイヌ語やアイヌ刺繍をしてほしいのですが、和人達の方が一生懸命なんですね。それは、それだけアイヌ文化には魅力があるんだなと思います。

隣の白板に掛けてある衣装は、次女が刺繍した物なんです。これは川村家に代々続いてきた図案を取り入れて私が図案を作って、娘が刺したものです。そして、さきほどいましたコンテストで優秀賞をいただいたという長女が作ったテーブルセンターが、今講師机に乗っているものです。どちらかといいますと旭川地方の模様は、樺太の模様に似ているんですね。長女は、樺太の模様がとても気に入ってしまって、私が作った図案では作らないんです。その樺太系の模様に似たような模様で、自分で図案を作って物を作るようになってきています。刺し方は、私はどちらかといったら割と粗いんですが、この長女が作る物はとても目が細かいんですね。次女が作るのは、それほど細かくもなく粗くもなくという感じです。

それでは、今日のテーマ「アイヌとして生きるまで」ということに話を移します。私も自分がアイヌですというまでには、いろいろなことがあり、長い間本当に大変でした。私は旭川の近文で生まれまして、物心がついた時には産みの親はいませんでした。父は後妻をもらい、妹や弟が次々と生まれまして、私は祖父母が本当の親だと思って育ちました。とても可愛がられて、愛情いっぱいでしたので、じいちゃん、ばあちゃんが大好きでした。小さい時は自分の親だと思っており、父さん、母さんと呼んで育ったんです。

近文の私が生まれた家には、じいちゃんの母、私にしてみればひいばあちゃんが出て、口の周りに入墨をしていました。砂沢方のおばあちゃんですが、ひいばあちゃんの思い出が一つだけあります。それは、私がまだ学校に入る前のことでした。春になって、雪がところどころまだ残っている時に、私の手を引いて畑へ行っただけです。ちょっとだけ山になっている畑を掘って、そこからとろろ芋（長芋）を1本だけ持ち帰って、それをおろし金で擦って私に食べさせてくれたんです。その時、人参も擦ってとろろ芋に混ぜたんですよ。とろろ芋に混ぜて醤油をちょっと入れて、私に食べろというんですね。人参は体にいいんだから食べろと。でも、私は子供の頃は人参が嫌だったんです。人

参を入れないで食べたかったなというのがその時にすごく思ったものですから、残念な気持ちが今でも忘れられせんね。

川村家のひいばあちゃんも近くに住んでいましたので、よく家に来て、いつもじいちゃんとアイヌ語でいろんなおしゃべりをしていましたね。川村ムイサシマツという名前です。アイヌ文化の活動はその頃からしていました。体の大きい人で、色の白い、口に入墨をした、きれいなばあちゃんでした。ロシアの血が入っていると聞いています。家にいる砂沢のばあちゃんは小柄でしたが、川村の方のばあちゃんは大きいので、私はいつも「でぶばば」と呼んでたんですね。とても可愛がってくれました。

私が小さかった頃は、家で熊祭りもしましたし、よく人がたくさん来て、アイヌの歌や踊りも、炉を囲んですごい勢いで踊っているのを覚えています。炉を叩いてユーカラ（口承文芸）をしたりして、本当にいつも人が集まっている家だったんですね。そのじいちゃん、ばあちゃんとの思い出がたくさんあります。

私が小学校4年生の時、旭川を引き払って函館へ家族9人で引っ越しました。じいちゃん、ばあちゃんが苦労して築き上げた財産である家とか畑も売り払ったと思います。現在の湯の浜観光ホテルの隣でお土産屋を出したんです。そのお土産屋の看板には、「アイヌ木彫土産店」と書かれていたんです。その時初めて私はアイヌという言葉を知りました。何のことも初めはわからなかったんですが、しばらくすると周りからちらほらとアイヌという言葉に、よくないニュアンスが出てくるようになりました。

湯の川小学校に転校した時、隣の席の子はその学校の先生の娘さんだったんです。とても可愛くて日本人形みたいな子でした。私は子供の頃は、くせ毛でチリチリだったので、そういう日本人形みたいな綺麗な髪の子がとても羨ましかったんです。だからすぐ仲良くなりまして、お友達になったんです。私は嬉しくて、家に帰ると、じいちゃん、ばあちゃんにその子話をしたと思うんですよ。しばらくしてから、ある時じいちゃんはその子の家に行くというのです。何をしに行くのか私にはわかりませんでした。じいちゃんは砂沢友太郎という名で、白い髭を生やして、あまり大きな人ではないのですが、腰にタシロ（山刀）を下げていたんです。どういうわけか昔のアイヌのおじいちゃんは、腰にタシロを下げていたんですよ。私を連れて私の同級生の女の子のいる家に行ったんです。その人はびっくりしたと思います。

玄関に入ったら上品なおばあちゃんが出てきました。そして同級生の女の子も来ました。そうしたら、じいちゃんが丁寧に挨拶をして、実はうちの子がお宅の娘さんと仲良くしていただいているということで、ありがとうございますというんですよ。そしていろいろ話している中で、アイヌの話をしたんです。私は、それがすごく嫌だったんですね。そうしているうちに、もしこの子がバカにされたり、いじめられたりしたら、その時はよろしく願いますねとその女の子に話しているんです。その女の子のお父さんの先生にも、くれぐれもよろしくお伝え下さいといっ

て話は終わりました。その上品なおばあさんが、それじゃ息子には良く申し伝えておきますというのを聞いて、帰ってきたんです。そのせいかどうかかわからないですが、湯の川小学校でも湯の川中学校でも、差別とかいじめで嫌な思いはしたことがなかったんですね。その点私はとても幸せでした。お友達もたくさんいましたし、その頃の友達は今もお付き合いさせていただいています。ただ、妹や弟達は嫌なことがずいぶんあったようです。

じいちゃん、ばあちゃんと暮らしたくて中学3年の時に函館から芦別に引っ越し、そこで娘時代を過ごしまして、結婚しました。結婚は相手方の親から猛反対にあいまして、ばあちゃんとか義理の母親が向こうの親に結婚式の事を相談に行ったんですが、親戚兄弟もそれなりに立派な人がいるので結婚式はできませんと、はっきり断られたんです。私もその場にいたんですが、腹も立ちませんでしたね。それならそれでいいわといって、帰って来ました。

夫になる人は公務員になりたてで、社宅を借りて一緒に住もうということになりました。そしてすぐに籍を入れたんです。籍を入れて、しばらくしてから向こうの父親が、子供を作るなどか、お前にはもっと相応しい女がいるはずだというんですよ。夫もすごく悩みました。私も夫以上に悩んだんですよ。その時は本当にもう具合が悪くなるぐらい悩みましたね。初めて、アイヌだからということで差別されました。結婚したのに結婚式も挙げられない、子供も作るなどかかれて、その時は流産しちゃったんです。それは、親も息子が不幸になる引き金を引いたようなものだなと今は思います。後になって考えてみますと、流産してほっとしたのかなという気もしましたね。本当に悲しいですね。

そうこうして、半年ぐらいましたらまた子供が出来たんです。私にはすぐわかりましたが、前回のことがありますが、夫にも誰にも子供が出来たことはいわなかったんです。そして子供がお腹で動くようになってから、子供が出来たみたいと夫にいったんです。そうしたら喜んでくれました。そして、産まれた時は本当に嬉しかったですね。無事に産まれたことも、嬉しかったんですが、これはもう大勝利だなと思いました。子供の顔を見たら本当に可愛くて、産まれた夜は嬉しくて一睡もできませんでした。これからはそんなことで悩むのは止めようと思いました。私ばかりではなく、夫も私の父をはじめ、じいちゃん、ばあちゃん、それから反対していたはずのむこうの両親までが本当に嬉しそうでした。しょっちゅう遊びに来て、子供を見て喜んでいたので、その頃は本当に幸せだったのですが、幸せな時期も長くは続きませんでした。

今度は夫の方が職場で、アイヌの女と一緒に子供も出来てどうだというような感じでいわれたんです。はっきりはわかりませんが、もっといわれたかもしれないです。その時も夫は泣いていましたね。私はそれを見て、私と一緒にになったばかりにそういう思いをさせられるのならそれも可哀想だと思ったんですが、それと同時に、何と情けない、どうしてもっと強くなってくれないのとも思いました。子供も出来たばかりで、今からこれでは私も本当に辛かっ

たんですよ。どうしていいかもその頃はわかりませんでした。

下の子が生まれ、それまで病気なんかしたことはなかった私なのですが、病気をしたりしていろいろなことがありまして、芦別から静岡の掛川へ行った後、6歳と4歳の子供を連れて離婚することになり、北海道へ帰って来ました。そして、ばあちゃんとまた暮らすようになったんです。アイヌのことで結婚してからずっと嫌な思いをいっぱいしてきたのに、ばあちゃんと暮らすと、またアイヌ文化の活動に関わることになるんですよ。大学生が来たり、大学の先生が来たりして、ユーカラを録音するのに声を大きくすると、近所の人に聞こえちゃうんですね。だから子供に絶対いいことはないと思って、差別がとても心配で、ばあちゃんには悪いんですが、離れて暮らそうと決心して、芦別から苫小牧に引っ越したんです。

苫小牧に来たら、北海道ウタリ協会苫小牧支部というのがあるのがわかりました。それは、困った時に相談に乗ってくれたり、仕事がない時に仕事を探してくれたりして助けてくれるんだよ、ウタリ（仲間）はお互い助け合って生活しなきゃって強く勧める人がいたんです。私も見知らぬ土地に来て、すごく心細かったの、誰にもいわずに黙っていればウタリ協会に入会してもいいかなと思って入っちゃったんです。でもそれも変な話で、アイヌが嫌で芦別から苫小牧に来たはずなのに、しばらくしたら寂しかったんですね。子供達も、ばあちゃんとずっと長いこと暮らしていたのが、急にばあちゃんがいなくなって寂しかったようです。1年も経たないうちに、やっぱりばあちゃんと暮らそうということで、ばあちゃんを呼んだんですね。ばあちゃんも芦別で寂しくて、泣いて暮らしていたそうです。

私はアイヌ語がわかりませんし、覚える気もなかったんですよ。アイヌ語は難しいから中途半端に覚えるんだったら覚えられない方がいいと思ったんです。その頃は仕事に追われて、生活も大変だったですし、一生懸命働いて2人の

子供を育てなければならなかったものですから、アイヌ語どころじゃなかったんですよ。今思えば、大失敗でしたね。覚えようとすれば、いくらでも覚えられたのになと思いますね。

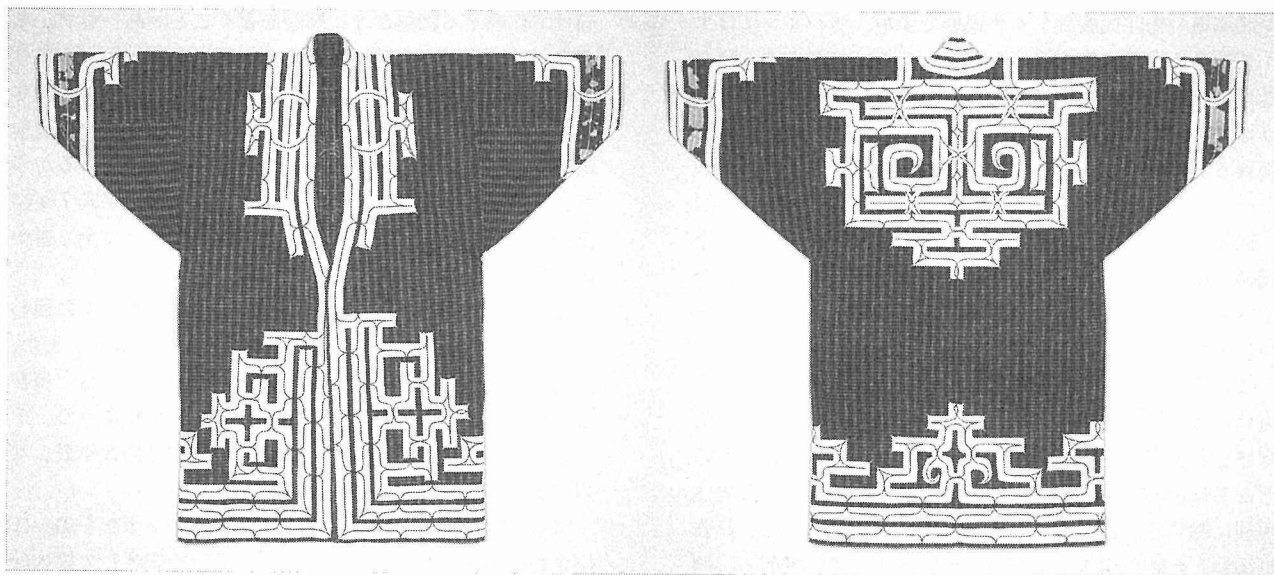
大学の刺繍講座の生徒さんの中で、本州から苫小牧に転勤になって来たという奥さんが、今、アイヌなんているんですかというんです。私はアイヌですよといったら、びっくりするようになるぐらい驚いているんですよ。でも私は、母は和人ですから半分でも、アイヌのじいちゃん、ばあちゃんに育てられたから3分の2はアイヌとしていいかなと自分の都合のいいように思っています。

こういうことで、今までいろいろな辛いことがありましたが、もう1歩先へ進んで行かなければならないと思います。これから生きていくアイヌの血を引く子供達、若い人達も生きていくために、どんな困難にも打ち勝って生きていってほしいと思います。私も一時は弱気になりましたが、母親も子供も強くなっていかなければならないと思います。

アイヌを差別したりバカにしたりする人もおりますけれども、この世の中には、これだけたくさんの人間がいるんですから、その中のごく一部の何人かの人にいわれたからといって、恨みや悲しみ、悩んだりして、自分の人生を変えちゃうのはどうかなと思います。それを踏み台にして、もっともっと強い人間にならなければならないと思います。少なくとも差別行為をした人よりも遥かに遅くなるように頑張っていた方がいいと思います。

私達の先祖は素晴らしいのです。それに恥じない人間にならなければなりません。毅然として自信を持って生きていきたいです。子孫のために、くじけることなく頑張してほしいです。また、アイヌは本当に優しい民族です。この心優しいウタリ（仲間）達がいつまでも幸せでありますよう心から祈りながら、今日のお話を終わらせていただきます。私のとりとめもない話を長い時間聞いていただきまして、ありがとうございました。

砂沢さんが複製したルウンベ（木綿衣）



「海を渡ったアイヌの工芸—英国人医師マンローのコレクションから—」図録より